

反転授業に向けた準備 —インターネット上の課題の作成と実用—¹⁾

ウンサーシュッツ・ジャンカーラ (立正大学心理学部 准教授)

Preparing to switch your classroom:
Creating and using online lessons

UNSER-SCHUTZ, Giancarla (*Associate Professor, Rissho University Faculty of Psychology*)

Abstract

Two major points of tension can be observed in English education: How to first deal with the need to provide review within limited class time while also providing opportunities for students to practice the skills being studied, and how to second deal with the need to provide worthwhile and meaningful out of class study while also not creating significant workloads for already harried teachers. One way to deal with these problems that has drawn attention in recent years is to flip the classroom: That is, to put review and passive study activities outside of the classroom as homework assignments, thus enabling teachers to dedicate more time to active and productive exercises in class. This article reports on one such attempt to flip the classroom in a required speaking class, including how it was done. More specifically, I describe how I provided students with video lessons embedded in Google Forms; how I planned, created and used them; and what kinds of problems were experienced. In doing so, this article provides insight into why one might want to flip the classroom, and how it can be done.

Key words : English education, flipped classrooms, computer assisted language learning (CALL), out of class learning

序論 英語学習の基本的な問題

一般的に考えると、語学には大きな問題点が潜んでいる。生産的で動的なスキル（自ら思考を口頭で伝えるという話す能力および自ら思考を文としてまとめるという書く能力）の基盤は、受動的なスキル（言われた文章を理解するという聞く能力および書かれた文章を理解するという読む能力）であるため、突然「英語で話そう」と言っても、他のスキルの支援が必要である。実際に、規則を意識し、学習していくことが、大人の言語学習の特徴でもある (Schmidt, 1990)。そのことより、教員がその規則を提供し説明することができるため、理解することが中心である受動的なスキルが比較的教えやすいと感じる人も多く、学生も何かを「勉強した」と感じやすい (学生の文法学習に対する態度について Loewen et al., 2009を参照されたい)。一方で、語学の最終的な目標は言うまでもなくアウトプットであり、コミュニケーションに取り組むために生産的なスキルが不可欠である。しかし、書くことにせよ話すことにせよコミュニケーションは実践的であり、規則が多少あっても、文も会話も、参加者

が予想していた通りとはまったく異なる方向に進展していくものである。教える側からしても、規則よりもストラテジーを与えることが多くなり、教わる側からしても、伝えたいことがなければ、元も子もない。その意味では、生産的なスキルを教えることが比較的高度である。

大学の英語教育では、上記の問題がまた変わった形で表現される。とくに中堅層の私立大学の場合、その特徴の一つは学生の潜在的な能力が比較的高いが、まだその能力を思い存分発揮できないことであろう (金井, 2014)。この特徴が英語学習において顕名である。ほとんどの学生は、大学の入学の時点ですでに中学・高校の6年間英語を勉強してきたため、すでにかなり長い間英語の学習に費やしてきた。その6年間の学習で、英語の基礎的な能力が身に付いたはずであり、学生が一度も出合わなかった完全に新しく勉強したことがない文法等も、大学の入学時にはすでに少ないであろう。

しかし、大学受験のための英語は、受動的スキルのみであり、規則に関する知識はあっても、実践的な知識、つまり語用論的知識は皆無に等しい。持ち合わせ

ている英語知識を生産的な言語活用に用いるのに学生を慣らせる必要があり、どうしても一定の時間を大学以前に勉強してきたことの復習に費やすことになりやすい。上記に加え、学生間の格差も見られる。大学の受験法ともかかわっている(河内山, 2010; 目時, 2014)が、得意で復習をまったく要しない学生から、苦手意識が強く抵抗のある学生までいるのも、中堅層の私立大学における英語教育の特徴である。

その結果として、英語の授業では計画していた課題ができる前に時間が過ぎていくという循環に陥りやすい。すなわち、コミュニケーションが主たる目的な授業でも、学生のために基礎を支援しようとする、それでは時間がなくなり生産的なスキルを活かした練習をする時間がなくなってしまう。そのため、大学における英語教育を改善するために、解決していかないといけない根本的な問題は、どうすれば復習が必要な学生に、復習する機会を与えながら、授業内の時間を生産的なスキル(話す・書く)の練習により多く当てられるかである。

一方で、課題の必要性と採点の負担が、上記の問題の解決に対する大きな障壁になることも多い。言語の取得が長期的な過程であるが、90分の授業でできることには限界がある。そのため、有意義な授業外活動に努めることが重点である。しかし、課題が授業のおさらいになる傾向が否めない。また、課題が理解されないこともあり、簡単な間違いが多々ある。複数の学生が同じ間違いをした場合、簡単なものでもフィードバックを与えるために各課題用紙にコメントを書こうとすると、かなり長い時間が必要になり、重い負担に感じられるであろう。その結果として、授業外の課題が学生には無意味と感じられる一方、教員の採点負担も重く、どちらにとってもいわゆる Busy Work (何かに取り組んでいるという姿勢を見せるための課題)になってしまう傾向が見られる。そのため、大学における英語教育のもう一つの根本的な問題は、どうすれば課題を有意義なものにし、学生の理解を得られてフィードバックも与えながらより重要な授業計画等に時間が回せるよう教員の負担を減すことができるかである。

英語教育の問題に対する解決法としてみる「反転授業」

近年において、上記のような問題の応えとして、反転授業形式にすることが強く勧められている(Bergmann & Sams, 2012)。反転授業とは、ビデオ等で受身的な学習を授業外時間に学生に行ってもらい、要指導の課題を授業内時間に取り組む方法である。具体的には、授業の前に、学生に予習として新しい学習点を勉強させる。それによって、積極的に取り組むための準備

は万全であり、授業自体がより学生中心になり、時間を生産的な活動に活用できるといわれている。授業外課題の準備が負担になりやすい、とくにビデオを用いる場合、特殊な環境を整えねばならないといった問題もあるが、授業内で教員の指導がなければできないスピーキングの課題に取り組む時間を増やすのに有効だと考えられる。

上記の背景を踏まえ、2016年度より筆者が担当する English Speaking I/II において反転教室形式を活用する下準備をし、2017年度より筆者の持つ全科目に活用している。下記では、その活用課程を概説していくが、基本的なやり方は、学習点を説明するパワーポイント(PP)による映像(以降、「レッスンビデオ」)を Google Forms に埋め込み、学習点を確認する簡単なテストという練習を学生にってもらう方法になっている。課題そのものを課題用に作成したウェブサイトに取り組み、フィードバックと結果は Google Forms の成績評価レポートを用いて学生に返却する。下記では、その流れを詳細に見ていく。

Google Forms とは？

Google Forms は、アンケート作成のための便利かつ完全に無料なツールである。基本的に PC 用にてきているが、簡単なものであればスマートフォンでも難なく表示されるため、自宅に PC が無い学生でも利用できる。なお、作成そのものは、スマートフォンでは対応し切れておらず、勧められない。Google Forms の特徴は、自由度がかなり高いことにある。実際に10種類の質問形式を選択して選ぶことになるが、ページセクションの使い方やヒントの表示法等で、多様な質問を作成することができる。音声のみをアップロードする・音声を録音させる機能が提供されていない点が、音声の再生・録音が可能なプログラムが望ましい英語学習用のシステムでは難点で、一見大きな弱点だと考えられる。だが、音声のみをアップロードすることができなくても、映像をアップロードすることができるため、空白かそれに近い状態の音声付きな映像をアップロードすることで対応できるであろう。音声のみを対象にした機能はないが、ファイルのアップロードは可能であるため、その機能を用いれば話す練習をさせることも可能である。また、質問の答えによって次に進むページを指定することができるため、反復質問等も作成することが可能であり、できるまでやってもらう等、その他の工夫もさほど難しくない。さらに、テスト形式を設定すれば、コメント付きの成績報告を学生に送信することもできる。結果のデータが Google Spreadsheet として保存されるため、Google Drive Suite の他、Microsoft Excel にインポートすることができ、成績管

理がしやすいという特徴もある。

Google Forms を使い始めたまでの道のり

筆者の場合、反転授業の実施までは、基本的に指定の教科書に基づく練習・復習課題を授業外学習の課題として指定し、文法や発音の学習点を確認しながら課題の答え合わせをすることが主たる活動であった。残った時間は、学生間のインタビューやその他の活動的なアクティビティに当てられた。こういった活動的なアクティビティを増やすべく、反転授業に向け、インターネット上の課題の映像として保存する PP となるものとして English Speaking I・II の学習点をリストとしてまとめた。具体的に、それまで授業外学習の課題として指定した練習・復習課題を授業内で行うことにし、学習点の説明をインターネット上のレッスンの対象にした。リストをまとめた後、各学習点を概説する PP を作成し、実際に口頭で説明しながら PP を録音して映像として保存した。学生の集中力を考慮し、極力各ビデオレッスンを短くし、音声付で5分未満になるように心掛けている。PP のスライド数は基本的に4枚のものが多く、最後に、Google Forms に埋め込められるよう、出来上がったレッスンビデオを YouTube にアップロードをした。アップロードの際、完全に公開するように設定することも可能だが、個人の著作権管理等から、限定公開の方が望ましいことが多い。限定公開に設定することにより、URL を共有した人のみが閲覧することができるため、基本的にこう設定した。同方法で反転授業を試みる場合、Google Forms の作成までの下準備はここまでとなる（図1）。下記で、実際にどう用いられるのかを概説する。

Google Forms の作成について

対象となる学習用の PP に対し、実際に Forms を作成していく。基本的に、どの Form でも、(1) Google Forms の冒頭に基礎情報を求める質問、(2)学習用のレッスンビデオ、(3)学習内容に対する確認問題、(4)インターネット上の課題に関するコメントを受け付ける質問という4部分から成立する。

(1)基礎情報に関する質問：詳細な作り方について Unser-Schutz (2018) を参照されたいが、どの形で用いても、提出後 Google Forms による結果を成績等に用い、授業外学習の確保と把握を図るために、学生の結果を正確に保管する必要がある、すべての Forms に対して学生の基礎情報（最低でも学籍番号）を記入してもらうことである。なお、学生の個人情報（学生番号）を求めることになるため、プライバシーとセキュリティを十分に検討する必要がある。Google Forms では、記入後結果をすぐに記入者（ここでは学生）に

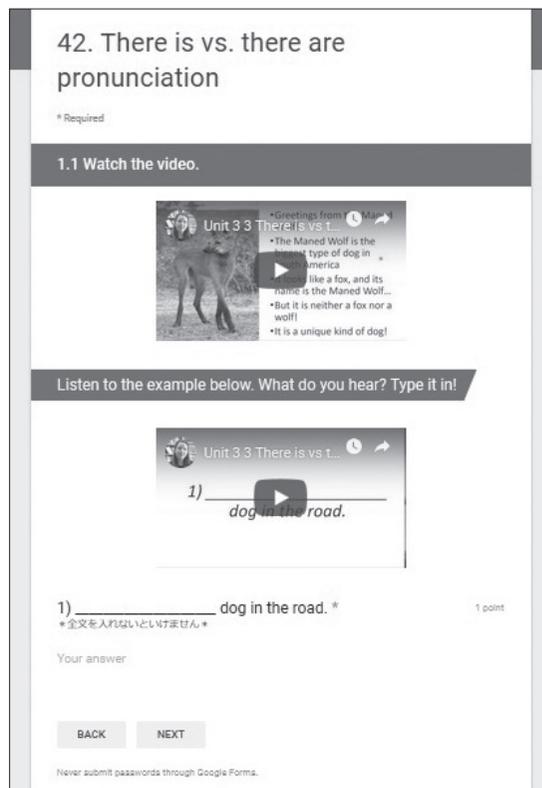


図1：Google Forms におけるビデオレッスンの一例

見せる設定が用意されているが、これが選択されていないことを確認する必要がある（図2）。

(2)学習用のレッスンビデオ：上記で概説した PP によるレッスンビデオを YouTube にアップロードをすると、URL が付く。その映像の URL を Google Forms に入れば、レッスンビデオが Form のページに埋め込められた形で表示される。

(3)学習内容に関する確認問題：レッスンビデオを見たか、またある程度その内容が分かったかを確認するために、内容に関する問題を4～5個程度入れる。反転授業の場合、理解を問う課題は授業で行われるが、確認問題が、真剣に取り組む必要があるという意識を促進するために働くと考えられる。しかし、あくまでも確認であることより、正解するまで同一問題に戻るといった反復型にしている。なお、(1)の質問も同様だが、基本的に確認問題を提出必修に設定しており、記入しないと送信することができないようになっている。

(4)インターネット上の課題に関するコメントを受け付ける質問：学生が積極的に Form 上のバグやその他の問題に関する報告や英語学習に関する相談が気軽にできる場を提供するために、任意の自由記述欄を送信

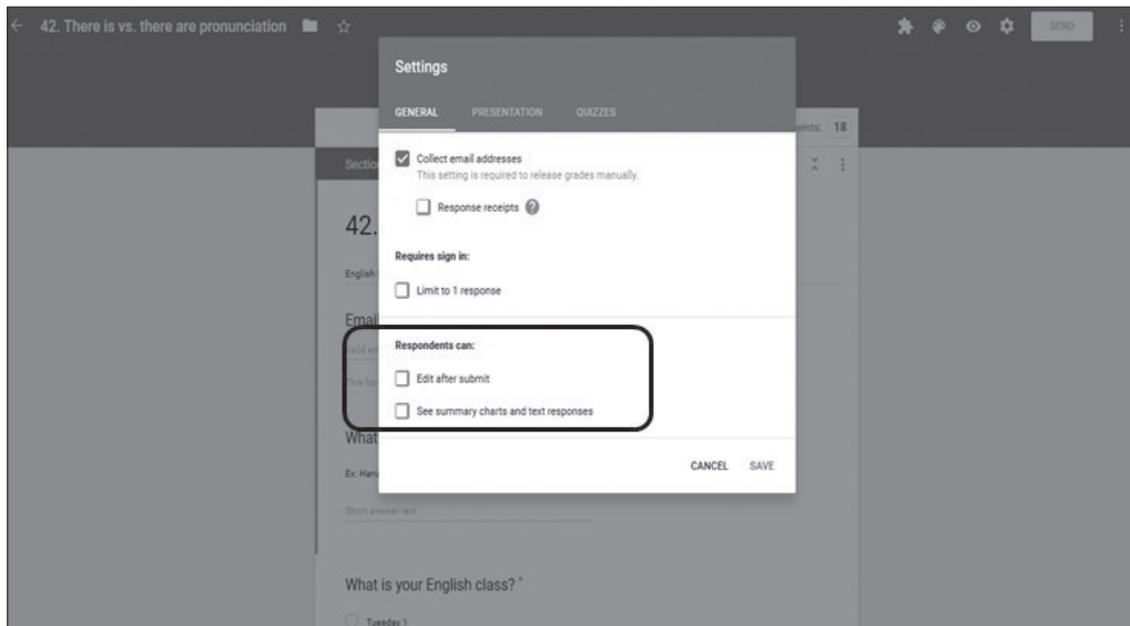


図2：結果の公開状況設定（○付けられた場所）

する前に入れている。

レッスンの指定と提供

授業では、映像を見ながらメモが取れるためのレッスンビデオのPPのプリントを各回のインターネット上の課題チェックリストと共に配布している。各回、3～4点を指定しており、基本的に、課題が指定された提出日、つまり原則として授業の次回までに実施するように指示している。各回で提示するURLの入力間違いの問題を避けるべく、Google Sitesで無料のウェブサイトを授業用に作成している（図3、図4）。簡易的なサイトではあるが、インターネット上の課題へのリンクを共有するのに十分機能しており、Google Formsと同様に、Google Driveの一部であることより、他のシステムとの相性がよく、問題を抑えることができる。

成績報告・管理について

課題の提出後、Google Formsのテスト機能を用い、採点をしている。上述の通り、確認問題の目的は理解を促進することであり、正解ができるまでの反復型になっているため、採点は主にやったかどうかを見ることにしている。学生へのフィードバックを与えると共に、受け付けた質問やコメントに答えるべく、各質問の正解と解析を、各Formに対する報告書として送信している。なお、以前は、紙媒体を重視し、メールマ

ジ（Microsoft Excelのデータを自動的にMicrosoft Wordに挿入する機能）で成績レポートを作成し、返却するようにしていたが（Unser-Schutz, 2017）、作成の負担や紙を多量に用いることを再考慮した結果として、メールという形の方が望ましいという結論に至った。

反転授業の教材作成の評価：必要性・負担度・効果

レッスンビデオの作成負担と必要性

多くの出版社より、インターネット上の課題プログラムが付いている教科書が提供されていることを考えると、これだけの労力が果たして必要なのかという疑問が持たれるであろう。しかし、反転授業と通常のインターネット上の課題プログラムは、本質的に異なるものであることを忘れてはいけない。たしかに、登録するだけで使えることを考えては、作成するのと比べて活用のハードルが低く、学生の自習にも好都合である。しかし、問題はなくはない。課題にバグが発生したときに、出版社に問い合わせる必要があるが、その際に教員が窓口になる傾向があるため、想像以上の負担になる。だが、何よりも教科書に付加しているインターネット上の課題プログラムの主たる目的が、名の通り復習することであり、教科書にはない追加説明等がないため、おさらいに留まる傾向がある。

そのため、「自宅で新しい学習点について学ぶ」とい



図 3：Google Sites で作成した簡易的ウェブページ（フロントページ）



図 4：Google Sites で作成した簡易的ウェブページ（課題のリスト）

うことにはつながらず、反転授業には該当しない。上記を踏まえ、手間がかかるとはいえ、個人で作成した方が、利点が多いと思われる。ことに追加説明が必要なポイントが出ると、適宜に作成でき、問題が生じたときは、すぐに対応できる。また、将来的に、他の教員にもシェアすることも可能である。最後に、重点点ではあるが、教科書が変わっても、著作権は個人にあるため使い続けられ、長期的な学習計画につながる。

だが、それだけやって負担増なのではないかという指摘もあろう。実際にかかっている時間は把握しにくい。1つビデオが長くても10分前後であるが、そのほとんどが5分程度である。録音にはその倍の時間、またPPの作成等でさらに2倍かかる。成績のフィードバックをする作業等を合わせると、やはり1課題を作成するのに約1～2時間が必要である。一方で、後処理の方が早くなったこともある。具体的に、手で書くことが少なくなり、重い用紙を持ち歩かなくても済む。

PCに慣れていない方であれば、採点がしやすいと感じる人も多いであろう。また、上記の予定時間はあくまでも初期に必要なものであるが、作っておけば課題等はしばらく大幅な見直しなしで使える。実際に、Google Formsによる反転授業を用いる2年目に入った現在、毎週の準備に費やす時間が減っている。

学生の実施問題

もう一つの問題点は、学生が実際にどう使っているのかを把握することである。いうまでもなく、ビデオを見ずにクイズだけをやる学生も出てくることを完全に回避することは難しい。そのため、一つの工夫としてビデオの中に必ず1枚だけ、本題とは関係のない特別スライドを入れている。テーマは、「面白い動物」としているが、学習点と関係がないものであれば何でもよいであろう。各Google Formの最後にこの特別スライドに対する質問を3個必ず加えている。配布資料に

はないため、見ていないと分からず、結果的に見た学生と見なかった学生を見分けることにつながる。基本的に、上記の他の質問に関しては、理解の確認が目的であるため、反復質問等の活用で記入したかのみを見て成績を付けているが、特別スライドに関する各質問について4点満点で成績を付けているため、学生が特別スライドに関する質問を正確に答えないと、課題全体の成績が極めて低くなる。初回の授業で特別スライドに関する説明もしているが、それでも理解できなかった学生も数人はいる。だが、送信されたフィードバックを見てから、特別スライドの必要性を理解するため、適当に記入する学生が少なくなる。なお、新しいシステムで不慣れなこともあろうということを配慮し、極力最初の数回に関しては成績を寛大に付けるようにしている。

また、学生がグループでやっているのではないかとこの指摘も受けることがある。実際に授業外にやっている以上、ネット課題にせよ紙媒体にせよ、コピーする学生が必ずいる。というのも、紙媒体を用いたときでも明らかに互いの課題を複写する学生がいたため、これはインターネット上の課題特有の問題ではないであろう。実際に、選択肢がランダムに出るように設定しているため、完全に答えをシェアするのがそれほど簡単ではない。だが、別方面から反論すれば、学生がグループでやるのが、それほど重要な問題ではないとも考えられる。そもそもテストの部分がほとんど理解に対する確認のみであるため、支障があるとは考え難い。むしろ、グループでやることにより学生同士が互いの学習を支援することが、一つの勉強法だと考えられ、反対する必要はないであろう。

授業がどう変わったのか

教員側の印象としては、課題の説明をしなくなったことが顕著である。これまでは、課題のやり方や評価の仕方に関する質問が提出後からもたびたび出ていたが、Google Formsの教材を作成してから、学生にコメント付きの成績報告を送っているため、学生が自ら確認することが簡単になったようである。また、確認問題はそもそも復習的で、多様な答えが出ないようにしているため、学生もやりやすくなったようである。学習の内容に関しても、解説はビデオなら日本語も用いるため、理解度が上がっている。筆者の経験では、日本語を使うと英語で答えてくれなくなるが多いため、授業は英語のみで行うことにしている。しかし、大人の得意な意識的学習能力を活かせなければ損であることを考えると、日本語による説明も重要だと思われる。これまでは、この矛盾が大きな葛藤点となっていたが、レッスンビデオで日本語を活用することによ

り、母語を通した意識的学習をする機会も設けられる。

また、より生産的な活動に取り組んでいる事前にきちんと学習してくるため、授業内の課題がよりスムーズに進んでいる。これまでは課題の確認に長時間を充ててきたが、反転授業にしてからは発音の練習やリスニングやビデオの課題、リーディングに対する感想執筆、学生間インタビュー等に使う時間が増え、より活動的な授業になっている。

学生の反応

現在、学生の大半が積極的に取り組んでいる。当然、毎週やらない学生もいるが、上記の課題複写問題と同様に、紙媒体のときと変わらない問題点であり、媒体が重要ではない。学生が成績そのものを見るようになってきたようで、これまではさほどなかったのに、最近では授業で互いの成績について話し合っているのを聞くようになってきた。

また、コメントスペースを置いているから、分からないことを教えてくれることが少し増えた。追加説明の依頼や、バグの知らせなどを書いてくれることもあるため、対応がしやすくなったように感じられる。しかし、それでもバグがあっても、教えてくれないこともあり、成績に響かない・苦情とは誤解されないと伝える等、問題があったときに積極的に報告してもらうための工夫が必要である。小さいことではあるが、実際に問題報告を受け付けるとき、必ず感謝を伝えるように心掛けている。

今後の展望

インターネット上の課題を用いても、それでもスピーキングに積極的に取り組んでもらうのに苦勞することがある。そのため、学生が気軽に話ができるようにサポートするために、本当にやるべきポイントを見直していく必要がある。授業時間の時間ロスは、以前と比べて少なくなっているが、やはり話すまでのサポートを充実すればするほど、活動に使える時間が少なくなることが根強い問題である。それ以外にも、課題を提供するためのウェブサイトが現在、課題をアップする機能以外にないが、英語学習のためになるリンクを付け加える等、役に立つ情報をアップすることができれば、学習のサポートにも働くであろう。最後に、現時点では本授業の効果は主に自身の印象によって図られているのみであるが、より客観的な形で学生への効果を検討する必要がある。そのため、本学年度末、改善に向けてアンケートの実施を企画している。

参考文献

Bergmann, J., & Sams, A. (2012). *Flip your class-*

- room: Reach every student in every class every day.* Washington, DC: International Society for Technology in Education.
- Loewen, S., Li, S., Thompson, A., Kimi, N., Ahn, S., & Chen, X. (2009). Second language learners' beliefs about grammar instruction and error correction. *The Modern Language Journal*, **93**(i), 91-104.
- Schmidt, R. W. (1990). The role of consciousness in second language learning. *Applied linguistics*, **11**(2), 129-158.
- Unser-Schutz, G. (2017). Increasing feedback for students with personalized reports and Google Forms. In P. Clements, A. Krause, & H. Brown (Eds.), *Transformation in language education* (pp. 414-421). Tokyo: JALT.
- Unser-Schutz, G. (2018). Flipping the classroom with Google Forms and online video lessons. *JALT Post-conference Publication*, **2018**, 334-341.
- 河内山有佐 (2010). 新入生の英語能力と入試形態および動機づけに関する調査 和洋女子大学紀要, **50**, 93-101.
- 目時光紀 (2014). T大学における入学形態と学生の英語力の関係 天使大学紀要, **14**(2), 53-60.
- 金井雅之 (2014). 中堅層大学における数理社会学教育——授業内容例と学生の反応—— 理論と方法, **29**(1), 123-130.

注

- i) 本研究は立正大学心理学研究所の研究助成金を受け、実施されたものである。

要約

英語教育においては主に二つの大きな問題が見られる。一つ目は、限られている授業時間の中で必要なレビューを取りながら、練習の機会をより多く用意し、バランスの取れた授業計画をすることである。二つ目は、授業外の学習を有効に促進するために、有意義な課題を提供することが重要だが、その採点に追われるハメに陥る過程である。近年においては、上記の問題への対応法の一つとして反転授業にするという方法が普及している。本論では、筆者が施行した英語授業における反転授業の試みを概説する。具体的に、Google Formsを用いたビデオ課題を作成したが、その企画と実用法を説明しながら、実際に出遭った問題点も振り返り、英語教育における反転授業の可能性を考察する。

キーワード：英語学習、反転授業、CALL システム、授業外学習